

方針とした。従つて姓名の如きも、以前の遼金時代には、契丹人や女真人が漢名を稱するのが常例であつたのに反して、堂々と蒙古名を稱へ、却つて漢人が漢名を棄てて蒙古名を稱へるもの少からぬ有様であつた。

元代には一種奇怪な漢文の體が行はれ、普通にこれを俗語體と稱するが、實はこれは本來蒙古語で書かれた文脈を、そのままに當時の俗語で直譯したのが爲に起つた文體であつて、漢文が自然的にかゝる體に發達したのではないのである。従つてこれは蒙古文の勢が漢文に影響を及ぼして發達せしめた特例であつて、支那文化史の上における注意すべき現象と見なければならぬ。

風俗の如きも蒙古族が漢化せられる代りに、この時代において漢人が蒙古化されたことが多かつた。今一々その例證を擧げること避けて、こゝには元を滅して新たに漢族の朝を建てた明の太祖が、その即位の洪武元年二月に詔を下して、天下の風俗を改めしめたといふ明の實録の記事によつて、その大概を知ることにした。その大意によると、初め元の世祖は朔漠から起つて天下を有するに至つた。そこで悉く蒙古の俗を以て中國の制を改易し、士庶は皆辮髮椎髻し、深い檐のある胡帽を着け、衣服も男女共に變じて窄袖となり、中國衣冠の舊風を失ひ、甚しきはその姓氏を易へて蒙古名を用ひ、蒙古語を習つた。風俗の變化既に久しくして誰も恬としてこれを怪しまない。太祖は久しくこれを厭ふてゐたので、ここに至つて悉く衣冠を舊に復して唐代の制の如くにするを命じ、辮髮椎髻胡服胡語胡姓等を一切禁止した。そこで百年餘りの胡俗を悉く中國の舊に復することになつたといふのである。

かゝる有様であつたから、元代においては支那の學術文藝は、蒙古族の下に壓迫されてゐた漢族の間に、公けの